

## 『好色一代男』の地方遊里物の成立経緯 (三)

島田勇雄

### (一) はしがき

標題は、もと、谷脇理史氏の所論から示唆を得、展開したものである。谷脇氏は一代男の五ノ四の副題に「江戸よし原高尾紫が事」とありながら、本文に小紫の件を欠き、改めて八ノ二に「江戸小ひらさき事」のあることに關して、当初五ノ四で兩人を対象とすることを意図したが小紫の件に及ばなかったので、改めて小紫を対象とする章を設けた、との論を出された。(『好色一代男』の成立過程(『近世文芸』九)。その示唆をもとに、副題と本文の内容との相関関係を吟味するうちに、副題と本文の内容とに相関関係のあること、副題に型があり、その型と本文の内容とに相関関係があり、その型によってその編集時期の

西鶴の問題意識とどの時期に副題を書いたかを検討したりその他の作業の材料としたりするなど、その応用範囲が広く、それが重要な捜査ヒントとなることに気づいたのである。それが地方遊里物に適用して、それが三分類されること、更にそれが地方遊里物の成立経緯を示すし、同時に三都遊里物の成立経緯を示すし、ひいては『一代男』全体の成立経緯を示すことに考え及んだわけである。私にとっては、谷脇氏の副題についての記述は実に重大な示唆を与えるものであったし、それによる学恩には実にはかり知れないほどの大きさのあることを痛切に感ずるのである。地方遊里物の存在形態から、西鶴が作品の素材について、素材の種類と同一種類の素材の変異体の創立ということにひとかたならぬ關心を行なっていたことを知りえた。素

材の種類については三都遊里物・地方遊里物・私娼物・地女物などと種種博覧したし、それらの内部的種類についても同様である。またその変異体の創出についても、類似の主題を持つ若干のものを試作した上で取捨選択し、採用作を決定するというふうな配慮を行なっている。表現技法においても、その時間・空間等の意識は次第に推移して独自の技法を確立するに至っている。それらの軌跡を追跡していると、一方では矢数排諧の連作技法の創意工夫を行ないつつ、同時に散文においてもその表現技法において成果を蓄積しつつあったわけで、その頃の西鶴はまさに充実した年代にいたわけである。

## (二) 総括

(1) 一代男の地方遊里物の第三の型は豪遊型である。遊里で豪遊する大臣遊びの類型を素材化した章である。同類は三都遊里物にも見られる。それらの相互関係については、まず三都遊里物の豪遊型が発想され、次に趣向の転換を意図してその変異体の一体としての地方遊里における豪遊型が着想されたのであろう、と私は考える。それが西鶴における趣向の展開の類型の一体である。その趣向の展開の類型には種種あって、小は部分的

構成法の変化から大は素材類型の変化に至る間の各種に亘るが、それらは時に表現技法の変化に関与することもある。素材類型との関係では、地方遊里物は三都遊里物の趣向上の変異体として創作されたものと考え、大臣遊び型や豪遊型などの共通型の存在の理由が合理的に説明できる。表現技法の変化は、その間に変化の方向性が看取されるので、それは表現技法の展開を示すものと把握できる。そのような把握の上で西鶴の表現技法の展開について言えば、『二代男』においてはほとんど常に各種の表現技法において三都遊里物のそれが最も素材であり、他の素材類型のそれがやや複雑であり、全券首部のそれが最も完成された形態を持つので——それはほとんど常に最完成部から逐次省略形を採って進化したと考えることができるが、そうとばかりは言えないものもあるので、それを含めておけば——表現技法の展開と本作品の成立順序とがほぼ並行関係にあることの論証の一材料とできるかと愚考しているわけなのである。

一迎の好色物の中で——女性物と改称してほしい——一代男と一代女とはそのさきがけとしんがりとの関係になる。一代男は世之介という名を共通項とする各種各様の人物を媒介として当代の各種の職域の女性の生活様式の一面を誇張的類型的に素材化したものであり、一代女はほぼ同一趣向で、回想する老女

を媒介として、一段と整序した形態で当代のより広範な職域の女性を素材化したものである。両作品が広範な職域の女性を素材化したのに対し、中間の作品は限定された職域の女性を中心にやや濃密度に素材化したものである。それらは概論的な作品と各論的作品と位置付けることができるであろう。

「好色」の概念には、日本の好色（色好み・徒然草など）と中国的好色とがあり（大岡信編『日本の色』等）、西鶴の「好色」が日本の好色であることは、近時はほぼ近世文学界での通説となりつつあるらしい。しかし、多くの解説書に見られる「好色修業」「好色風俗」「好色一代記」などの表現には伝統的な中国的なポルノ的好色のニオイがして、その印象は捨てきれない。本学の女子学生は明らかでそうである。ゼミの学生が「好色一代男」を卒論の対象と言ったところ、「まあ、いやらしい」と言われた。つい、一、二年前のことである。昔、むかしのことではない。そういうイメージを起させたには近世文学研究者に十分責任がある。西鶴の「好色」を日本の好色と解されるなら、その解釈上の態度を鮮明化し、合わせて「好色」の語の使用を避けてほしいというのが、女子大学の教職に関与した者の願いである。

一代女が従来の解釈としての懺悔物ではなく、女性物であることについては長谷川拙氏に論があり（『西鶴物語』等）、それがほぼ通説となっていることには徳田武氏の著書があり（『近世文芸』四〇）、長谷川拙氏の言われるように、一代男と一代女とは照応関係

にあると言えそうなので（『西鶴物語』）、私には一代男についても、ほぼそのような解釈が一般化しつつあるように思われる。もっとも、一代男については各人の既述の論者との関係から、いままら解釈の変更を表明しにくいという論者が多いように見受けられる。

一代男と一代女との差異の著しい点は、前者における遊里物の多さであり、そのことが後者における素材的変異とそれによる素材の整序感を印象づけることになっている。一方前者における素材の集団化による部分構想の存在を際立たせ、それが一代男の作品構造の節目節目を示し、本作品の構造感を量感させることになっている。また、その素材の大量さは、一代男編集以前の既成の転合書の量的多さのみならずその変異的素材の豊富さをも示唆し、それが西鶴における、前作の役者評判記物に続く遊女評判記物の準備的作業の存在を予想させることにもなっている。ところで、女性物一般に遊里物が多いが、それらにも西鶴の選択が働いていたものと考えられる。あらかじめ多くの素材を形象化し、それらの中から素材の優秀性等から取捨選択して第一作としての一代男に所載し、やや劣位のものを一且廃棄した上で、のちに復活戦によって巻五に所載し、更に劣位ものを第二作としての二代男に所載することにしたものと解される（『好色一代男』の二ノ四の成立（『解釈』五六年八月）。その

ことは三都遊里物についても同様であるべく、一代男と二代男とにおける遊里物の素材差は、ある種の論者の言われるような西鶴における遊里感の推移によるものではなく、むしろ右述のような選択事情に依るものと思われる。

西鶴の転合書には、六ノ二の本文前部の如き遊女評判記的感向によるもの、六ノ四の本文後部の前半に「此外見とがめて。五とせあまりの事共其かざりをしらず。名を書事もむごし」とするもの、一ノ六と三ノ二の冒頭に用いられて、私が瀬戸内海物と命名した類のもの、三ノ五の素材になったと思われる北陸物と命名される類【好色一代男】の三ノ五と四ノ一の類似性【解釈】二九ノ一）等種種あつたように本文分析から推定される。

なお、私の編集説を西吟の跋文を契機に述べたことから、長谷川強氏がそのような推定説は本文分析に基づいてなされるべきだとされる（『西鶴物語』）。それは長谷川氏の観察不足である。私の編集説は、かなづかい説以来の十数年間における本文分析に基づくものである。ただその提言は跋文を契機にしたに過ぎない。正直に言つて跋文をそれほど重視してはいない。その際、多くの本文分析の結果に基づき例証を挙げたのはその多年の分析に基づく結果である。そのことは、私がかかりに改稿説と名づけた谷脇氏においても同様のはずである。そんなことなどはじみちな分析を実行する人なら、体験的に自明なことと思われるのに、不審である。

前々稿で遊客の必要条件を裕福度と粹人度との二条件によつ

て整序することを述べた。裕福度は遊里遊びの前提条件としての軍資金の度合いを基準にしたものであり、粹人度は遊里遊びの練達度を基準にしたものである。通例遊客は粹人度の点で未練者から練達人としての粹人へと上昇するが、裕福度では分限者遊びの段階から豪遊段階に上りつめ、果ては無一文の極貧者に下落するのがお定まりである。前々稿で述べた上昇型は、粹人度の上昇と裕福度の下落の逆コースとの組合せの素材化であり、前稿の大臣遊び型は分限者の遊びの段階の素材化であり、本稿の豪遊型は大臣遊びよりの上り詰め段階の素材化である。その次の段階には、次第に遊客は零落し、家産が傾くという段階に進展するか、あるいは遊里遊びの果てを悟つて、遊里を脱出するかである。一代男では両者が素材化され、零落型は六ノ一の完全零落と六ノ三の完全零落以前となり、脱出型は八ノ四の女護島行となる。前者を上昇型の中に配置し、後者を最終章とすることで一代男は完了したわけである。

三都遊里物と地方遊里物とは、それらの素材集団類型での対応関係がかなり顕著で、大臣遊び型と豪遊型とは両者に共存し、そのことから、三都遊里物の趣向転換の一方法として地方遊里物の成立した成立した関係がまず看取される。三都遊里物の上昇型に対応する素材集団を地方遊里物は欠く。つまり遊客とし

ての練達や零落の過程は三都遊里物に素材化し、代わって地方遊里物では一定度の遊客水準に到達した人物の地方遊里へ立寄りの素材化をもって充当しているわけである。その、地方遊里物に世之介の粹人度の上昇型の素材を欠くことや、裕福度の下落型の素材を欠くことは、三都遊里の大臣遊び型の素材集団の編集段階にある一時期に、その趣向上の素材轉換の方策としてそれらが編集されたのであろうことを推定せしめる。

その編集ということについて、私は次のような過程の存在を考えている。つまり、既製の転合書の存在とそれに基づく編集・編纂によってある種の作品形象化の成立とを一応区分してみるのである。既成の転合書は、ある種の中心的人物を想定し、その一定の志向的行動に因る方式で、ある程度 of 文章化がなされてあつたと考えられる。そのようなものには長短種種の転合書があつたであろう。それらでは中心的人物は一定人物として特定されており、そのためその転合書ではその固有名詞は書かれていない。そのような転合書で文章化が充実しているものが、そのまま一代男の素材として採用されると、一ノ五・一ノ六・二ノ一・二ノ二・二ノ四等に見られるように世之介の名を欠く章になる。それに対し、ある程度の文章化がなされてあつても、編集・編纂の段階にそれらと編集・編纂の方針に基

づいて一定の文脈に納めるために改稿・増訂書き下ろし等がなされる必要性が生じることがある。あらかじめ右のような弁別をしておく、前編中に配置された地方遊里物に統一的に世之介の名を欠くこととか、一ノ五と五ノ三の如き類似した主題を持つ章があり、一が前編中にあり一は後の増補と考えられる巻五にあることとの相互関係とか、五ノ五の如く成人の章に元服以前の世之介の髪形図が画かれている理由とかがよりよく把握できるように考えられる。私の編集・編纂などの作業を單純に図式的に把握しないようにしてはしいのである。

一代男の構想を、七歳から六十歳までの好色修業の一代記という一本立て構想で統括しようとの把握が一般である。西鶴が一定の構想のもとに本作品を書き下ろしたとの書き下ろし説には好都合だからである。しかし、それでは巻五と巻六との世之介の年齢の重複の矛盾とか、そこに依存する世之介の裕福度の矛盾とか、そこにきわだつて存在する構想その他の断絶を十分説明できないはずである。それを具体的に言えば、世之介は四ノ七で二万五千貫匁の遺産相続をして大分限者になって目出度し目出度しと一件落着いたあとで、巻五では分限者の粹人で終止し、巻六に入るとたんに完全零落者として登場し、以後暫時裕福度・粹人度ともに不満足な矛盾した人物として出現する。

即ち、本文に即した分析を標榜する以上、その断絶を隠匿できないし、従って、一本立て構想による書き下ろしとの論の不都合なことは自明である。その解決には、巻四までの前編と巻五以後の後編との二本立て構想を探り、五ノ二・五ノ七を素案にないものとして処理し、六ノ一以後をそれ自体一構想として処理して、遊里物に対する西鶴の作家的姿勢を抽出するのが適切であると愚考する。更にその巻六以後も一つの大構想として自立する上に、その内部において上昇型・大臣遊び型・豪遊型の部分構想に分立することが見られる。その種の部分構想は巻四までの前編にも見られ、全巻が若干の部分構想に分れること、それらの統括によって全巻の統一化が実現していると解される。二本立て構想と二種の構想の承認とが望まれる。

### (三) 豪遊型の地方遊里物

副題の型を契機とする接近という方法論からすると、大臣遊び型と豪遊型とは同型となり、それでは区別されない。それらを区別したのは本文内容という基準を導入することによってである。本文内容が大臣遊び型と豪遊型とは相違するからである。単に本文内容が相違するというだけでなく、その容

観性的裏付というべきものとして、各種の描写法の差異が附随する。描写法の種類には種種あって、それには短期的に推移するものとやや長期的に持続するものなどがあるように思われる。その短期的なものかと思われるものがそれに附随する。

まず、地方遊里物の豪遊型として次の章を予定している。

巻・章 本題 副題

五ノ二 ねがひの搔餅 大津柴屋町事

五ノ五 一日かして何程が物ぞ 泉州堺ふくろ町的事

八ノ四 みやこの姿人形 長崎丸山の事

三都遊里物では素材は集団化されてあるが、地方遊里物ではそのことはない。それは地方遊里物は、巻五の五章を除くと、巻四までの諸章に分散的に配置するという全体的構想に従っているからと思われる。もともと一部の採択された諸章は各巻に配置され、それらとの競合で不採用になったものは一旦廢案になったわけである。その廢案になったものでは、五ノ五の如く元服以前の世之介の挿画を持つものがあり、そのことから当該章が一旦は元服以前として該当された章の本文に選択されて、挿画まで成就してありながら、別案による本文が出現し、それとの競合の末廢案になった、との経緯を示唆するものである。また一ノ七の如く十二歳の段落と十一歳の段落とが混在すること

から、挿面の成立までには至らぬながら、ある程度の文章化が成立してありながら廢案になったものの存在も推測される。そのようにそれぞれの成立事情・廢案事情を持ったものが多数あったので、西鶴はそれらの敗者復活を考え、それが巻五の六章になったものと思われる。即ち、一代男型文章への文章化の実現されてあったものが巻五に復活し、その段階にまで至らぬ素材が三素材一括一章扱いという方法で諸艶大鑑に採択されることになったものと思われる。そのように考えれば、遊里物については大量の転合書を西鶴は用意していたと知られる。

既成の転合書の段階の文章化と一代男のための編集・編纂の段階の文章化とは相等の質的差異の存在が考えられる。既成の転合書も、その創作時における構想感に基づく文章化であったはずではあるが、それ故にかえってその持つ文脈と一代男の編集・編纂段階の文章化の展開における文脈との間に齟齬の生じることになりがちであり、それも単純な部分的改稿で糊塗できればともかく、多くの場合既成の転合書を使用しながら文脈調整のための改稿を多用せざるをえなかったのが常であったと言つてよいのであろう。その点では、諸艶大鑑に流用されたものは時間・空間、指示・限定の小さい文脈によるもの、すでに一代男型文章に構成されたものは、その逆の関係になるもの

と言える。

文章化に関しての西鶴の修辭的創意工夫は大きく、それは一代男型文章・一代女型文章などの一章の構成法に関するものから、小は各種の描写法による部分的修辭法にまでの種種に及んでいる。その頃、西鶴は矢数俳諧の技法の開拓にも腐心しており、遂に夢中に悟るところがあったと『大矢数』の巻の四の自跋に述べているほどである。そのようにして開拓した技法の中に私が類型的付句法・連続的場面描写法と命名したような技法がある（「好色一代男」の俳諧的文章と一代男型文章（『文学』）。西鶴は、そのように俳諧のための技法の開拓に腐心していたが、同じ頃執筆した散文のための技法の開拓にも腐心した。そして矢数俳諧のために開拓した技法は、姿を変えて散文にも活用されて一代男の中に存するのを見ることが出来る。類型的付句法の技法は、後述の交遊型描写等に使用されるし、一代男では殊にその用例が多い。連続的場面描写法も一代男の各種描写の中に頻出する。矢数俳諧の技法と一代男の技法とは、それが韻文と散文という文体上の異質性にもかかわらず、その基層的要素においては共通するものを持っていたことが知られる。西鶴は常にそのように言語能力の可能性を局限にまで求め続けた求道者であったと言いたいのである。彼は決して突飛な

連想だけに依拠して文学活動を続けたわけではなく、限りなくよりすぐれたものを求めてひたすら努力し続けただけである。

いま、全体としての文章に関する問題を除外して、部分としての各種描写技法について考えようとする、全体としての文章構造の中に部分が占める機能ということに立ち戻らざるを得ない。一章の発端部で前提的に一章の情況設定を説く部分と、その章の主題部で主題を説述する部分とは、それらに托される機能が異り、それぞれの機能を存分に発揮せしめるためには、その機能に應じる表現上の工夫がなされることは当然であり、そのようにして当該部分の機能に対応する描写技法が工夫されたと言つてよいであろう。

私は一代男型文章を次のように構造分析し、それぞれの部分にそれぞれの機能を託していると解する。(「好色一代男」の俳諧的文章と一代男型文章〔「文学」〕の部分的補充)

章首——導入・承接

本文前部——前提的情況設定部

(7) 世之介の生活環境の設定

(1) 世之介の旅

(6) 後ジテとの出会い

本文後部——主題部

(2) 後ジテ中心の叙事・解説

章末——終結・連接

本文前部は一章の発端に当たつて当該章の主題の展開される物語空間に関する情報を予告的に提供するものである。(7)は世之介の勘当・遺産相続などのほかに旅立の理由、(1)旅は遠近とも含める、(6)の出会いのは、本文後部との関係から種種の変異が考えられる。(7)(1)を世之介に関する事項と解されるのに対し、(6)は後ジテに関してそれのための導入部と解される。地方遊里物では、遊里の地理的地形的特性の描写や、当該遊里の風俗上の特性等に基づく個性的特異性を中心にして遊里紹介を行う。本文後部ではその遊女の行動様式を通じてその遊里の個性的特異性の描写にとめる、といった方法を重用する。三都遊里物では遊女の固有名詞を本文にも副題にも記述して、遊女個人の評判を志向することを示しているが、地方遊里物では遊女の固有名詞を記述することはほとんどなく、稀にそれを本文に記述しても副題に挙げることは全くない。そのことが示唆するように、それでは地方遊里全体の評判が主題とされているわけである。

本文前部(6)の機能は、本文後部への導入部として重要である。個々の地方遊里については読者は一般にさして知識を持た



ないものなので、読者にその遊里についての概括的情報を予告的に提供して、続く本文後部の主題部への導入的機能を果すわけである。それを個々の遊里の個性的特性の描写によって印象深く興味深く解説すること、そのための技法の開拓に西鶴は關心した。主題部はすぐれた導入部の存在によってその表現性は一層効率的となる。そのように、部分と部分との相互連携によって全体としての一章の表現性・主題性はますます高められる。西鶴はすぐれた言語能力の開拓者であった。その具体的方法としては、その遊里の地理的地形的特性を視覚的に解説したり、遊里全体についての総合的特性を解説したりする。後者では地方的特性を具えた人物を点在させる描写を行ったり、遊女の服装描写や行動描写の範型によったり、遊女名を三名連記する範型によったりして遊里特性の記述をする。それらのうち、人物の点描による描法を人物点描法と命名し、遊女の服装描写によるものを服装描写法と命名し、遊女名の三名連記を三名連記法と命名する。それらは遊里物には見られるが、その他の素材にはほとんど見られない。その点ではこれらの描法は遊里物専用技法であると言つてよいかとも考えられる。また、地方遊里物は各巻に散在しているが、それだけの描法を持ち、それらの描法が比較的短期間内の描法であったかと思われれることとそれ

らに関連づけると、それらの地方遊里物がほぼ同じ頃に成立したのであらうと考えられ、そのことから一代男が全巻首から遂次書き下ろされたものではなからうとする成立論の裏付けの論拠とすることができそうな感じを受ける。

地方遊里物専用描法のうち、ほとんどの描法は大臣遊び型や豪遊型に用いられて道中立寄り型には用いられないということがある。時に例外的な場合もあるが、それも成立経緯論で解決できるようなものである。即ち、成立上大臣遊び型と豪遊型とは有縁であり、道中立寄り型は異系であると言えようである。その委細は成立論の問題としたい。地方遊里物が成立上二系列に分けられるということの裏付けは描写法上の差異だけでなく、作品構造上の異質性にも求められる。

人物点描法は本文前部で用いられる描写技法で、本文後部の主題部に対する導入的情報として物語空間の環境描写を実施して、主題部の表現性を一段と効率的ならしめるものである。導入的描写としては種々な描写が可能であり、また現に試行されているが、それらのうち、特に当該地方の社会環境的特色を具えた人物を（時に動物を）点在させることによつて、当該遊里の風土的特性を読者に印象づけようとする技法である。現実的にはその種の人物が恒常的に多出する可能性は必ずしも多くな

いはずであるが、そのような論理的可能性を超越して右のような認定を行なうことによつて読者の合理主義的解釈をさそひ、当該遊里の形象を筆者の行なつた造形に即して把握させるものである。その例として次の四例を挙げておきたい。前二例は大匠遊び型の例、後二例は豪遊型の例である。

(例)ありさま。ひそかに見わたせば。都の人そうなる。色しろく。冠着さうなる。あたまつきして。しのぶもあり。宇治の茶師の。手代めきて。かゝる見るめは違はじ。其外六地蔵の馬かた。下り舟まつ旅人。風呂敷包にしきみ粽を。かたけながら。買さしのもとすゑを見合。若氣に入たるもあらばと。見つくして又。泥町に行もおかし。

(一ノ五 尋てきく程ちきり)

(例)花園といふ町すぢを。西にいれば。一つわきさし差て。賢つき厚く。いづれ笛太鼓の一曲なりさうにみえし人。羅出たるは。此あたりに。八百。八杯宜の子共。諸方の浪人。友睦ぎにしてかさえ弱は。何しのおぞかし。(二ノ四 誓詞のうるし判)

(例)立よる者は馬かた。丸太舟の水主共。浦辺の彌師。相撲取齋屋のむすこ。小間屋の若き者。恋も遠慮もむしやうやみに。見しりごしなる悪口。或は小尻とがめ。又は男だて。一町に九所の喧嘩。よむのたゝくの取巾を取の。羽織が見えぬのも。只さはがしくさば髪して。片肌ぬぎ。懐にはなねち。手に白刃取。此所の色町を。園の場にするぞかし。命しらずの寄合身を持たる者の夜ゆく所にあらず。

(五ノ二 ねがひの極解)

(例)同じ枕の友ども。一人は覗引せよ。家の差園を書て居る。又一人は。只居よ合はと寝ながら。編笠の緒こしらえける。独は象牙の掛羅より。もぐさ取出し。三里にすえて白をしかむる。女郎は女良でかたより。更ゆくまで。糸取手相撲して。折ふしは眠。きのどくなる夜の明るを待は。そのまゝ、籠り堂のごとし。(五ノ五 一日かして何程が物ぞ)

一ノ五はその前の文に地理的描写、あとの文に俳諧を詠ひたしなみの豊かな遊女の描写、島原の遊女の着おろしを着用する土地柄などの解説がある。浮橋康彦氏の所説の如く、伏見は西鶴が好感的所遇する物語空間である。この意は五ノ三のところでこの「よくの世中に是は又」の室津の遊里と類似の主題である。そこでこの両章は競合の末五ノ三は一旦廢案となり、のち修正案で巻五に復活挿入されたのであらうと考えた。(「好色一代男」の成立についての試論—地方遊里物の一種を中心に「近代」四七号)。なお、五ノ三は人物点描法の代わりに七月十四日の盆踊り風景の描写を充当している。二ノ四は奈良の描写の一部である。木辻町の遊里自体の描写ではなく、遊里遊び以前の奈良の街の描写を、鹿と能楽関係者との描写で行なつたものの一部である。このあとの二ノ四の本文後部は二素材の組み合わせから成立するが、競合した素材は諸説大鑑に使用されている(「好色一

代男」の二ノ四の成立〔解釈〕。

五ノ二は前の文に遊女の風俗描写があり、続いて引用文の遊客の描写がある。それによって、大津の遊里の特性が鮮明化される。大津は早くから日本海方面からの生鮮食料品を初めとする生活用品の京への輸送路として重要であったが、中世末には馬方・車力らによる一揆の拠点とされたこともあったほどで、西鶴の遊客描写は当時の中継基地としての大津の状況を勢踊とさせるものがある。それが主題部の豪奢と好対照をなしている。西鶴の地方遊里の環境描写の方法には、地理的描写・遊女描写・遊客描写・風俗描写・揚屋のインテリア描写などがあり、個々の章の本文前部における遊里の描写は、それらのうち若干の描写法の組合せによって表現される。

五ノ五は、堺の袋町の遊里で遊女の貸しの依頼を見えにして喜ぶ風があり、その結果座敷から遊女が姿を消したあとの遊客の描写で、その遊女たちも実は所在なく夜を明かすことの描写を附加してある。それらの各描写法は、服装描写法の分析の経験からすると、それぞれの成立にはある種の経緯が辿られるが、多くの描写法についてはまだ十分の調査を行っていないし、またそれらの全体の成立順位についても同様である。近くまとめておきたいと考えている。

人物点描法は地方遊里物に限って見られ、三都遊里物その他には見られない。おそなくこの技法は、地方遊里物のために開拓され、それとともに終ったものなのであろう。そのことは、地方遊里物の特性を鮮明化する方法として西鶴がその頃考えたもので、西鶴が地方遊里の特性を三都遊里の特性との対比において認識していた具体的内容を示唆するものと言えそうである。人物点描法そのものは三都遊里物にもその他にも見られないが、三都遊里物にはそれと共通する要素を持ち、その根源となったであろうと思われる形骸はある。その種の技法の展開として人物点描法を充当すると、西鶴のある種の技法から他の技法を順次展開していくという方式の一をそれに見ることができ、そこで、そこに西鶴式思考法の一範型が見られるわけである。その人物点描法と有縁関係にあるものとして考えられるものに、私が矢数俳諧における西鶴の技法として挙げた連続的場面描写法がある（「好色一代男」の俳諧的文章と一代男型文章〔文学〕）。それは筆者の視点を一定の場面に固定して、その場の情景を順次描写していくものである。たとえば七ノ一「其面影は雪むかし」の冒頭の茶の湯の場では、盃切り、世之介の正客、茶菓子、茶の水、連句、茶の花、高橋の装束、と描写を展開させる。この描写の対象を遊客に転回させれば人物点描法が成立する。地

方遊里物でその人物点描法が複数回使用されているが、そのこととは西鶴がそれに描写法の一としての市民権を与えたということであつて偶然の所産ではないということを指示するものである。そのようにして矢数俳諧で獲得した連続的場面描写法を淵源として他の多くの散文の技法が生産されたわけである。

そのように矢数俳諧でも地方遊里物でも、それぞれの素材とその主題とに対応して、最高度の効率を発揮できる表現法を西鶴は常に模索した。西鶴の表現技法に託したものは最高度の言語能力を発揮する方法であり、その不変の熱意が二万三千五百句の成就を導き、一代男をして浮世草子のジャンルの嚆矢たらしめたのである。地方遊里物の交遊型の本文の本文後部の主題の表現としての豪遊描写に右の連続的場面描写法の一態や類型的付句法と同種の手法が見られる。豪遊型は五ノ二・五ノ五・八ノ四である。

ゆき共乗態あとさきに隔り、こゝろのまゝ、咄しのならぬ事気のどく也。三人一所に昼も寝ながら。手づから飯餅を焼て。それをなぐさみにして。ゆく事ならばと申す。それこそ何よりやすき望なれと。即座に乗物爪ちやうならべて。中のへだてを取はなら。釘繰にてとち合。中に火鉢を仕懸。角に棚をつらせ。枕屏風手拭掛まで入て。六尺十疋人すぐりて。ちいさき家のありくがごとし。何事もなれば

なる物ぞかし。(五ノ二 ねがひの飯餅)

(4) 定宿をきはめ。大臣といはるゝ程の人。いかなる若か寝息とめし。其跡を肌馴るゝ事。すこしのこゝろをつけず口惜しき事也。去人京にて。丸居の七左衛門方に。梨子地の繪長持に。定紋を付て。四季の寝道具とゝのえて。枕箱煙草盆其外うつは物。水呑まできよらにあそばしける。何か審にあらず。思へば大事の御身なれば。世之介様にも。是程の事はとかなりぬ。(略) 我都に帰たらば。分別がある。数長櫃をこしらえ。遊女参客。入程の諸道具をいれて。ゆくさきくゝもたせ侍るとなり(五ノ五 一日かして何程が物ぞ)

(5) 折節初紅葉の陰に。自在をおろし。金の大間鍋。もろこしの酒功説を選すとて。遊女三十五人おもいゝの立出。紅るの。網前だれ。より金の玉だすき。あや桐のおもひ葉をかざし。岩井の水は千代ぞとて。亂れ遊びの大振舞。我京にて。三十五両の鶴を。焼鳥にして。太夫の肴にせし事も。今此酒宴におどろき。風俗も替りて。しほらしと替れば。都の女郎さまがたの。風情が見たひといふ。それこそわけ知の世之介様に。尋られといふ。幸このたび持せたる物有とて。長櫃十二さは運ばせ。此中より太夫の衣襲人形。京で十七人。江戸で八人。大阪で十九人。彼舞台に名書てならべける。めいゝく仕出し。顔つき。腰つき。ひとりゝ替て。所によりて足は誰。それはどなた。いづれか。いやらしきはあらず。長崎中寄て。詠め暮しつ(八ノ四 部のすがた人形)

五ノ二は伊勢参りの禿たちの願ひにまかせて、二頭立の道中

馬に小家のような仕懸を作つて、三人の秀が昼寝をしたり火鉢で極餅を焼いて食べたりにしてやる趣向である。実は、それは八ノ一「らく寝の車」の趣向とほぼ同種の趣向で、(地方遊里物を三都遊里物の趣向の転換と解することにする)と、趣向の転換の帰結であり、矢数俳諧法における類型的付句法の一体である、と考えられる。八ノ一は次の如くである。

車三輛の上に花籠をしかせ。太夫さまかたへ申遣し。一様は。水色の鹿子。白箱籠の。投頭巾を着て。四人宛三輛にのりて。一輛には。樽折重君。枕箱燭台に。大燭燭を立。出口の門より。はや引懸。飲懸。なごりおしきは。朱雀の細道すぎて。大みや通を。南がしらにひかせ行。

八ノ一ではこのあと「小井田の道橋の詰」で九人のやり手が待ちうけてすいなもてなしをする件があつて首尾呼応することになる。この八ノ一の末社と車との件を禿と道中馬との件に変えると五ノ二の趣向が成立する。それが私の言う矢数俳諧の類型的付句法の手法である。一代男にはその類が頻出する。たとえば、

田舎者と流行歌——三ノ五・四ノ一  
遊里での人形廻し——五ノ六・八ノ四  
はすは女の説明——三ノ三・三ノ六

たしなみのある遊女——一ノ五・五ノ三

そのほか各種職種の類型的解説から一代男型文章・一代女型文章などの文章構造や副題の型や女性描写法・室内描写法・遊女名等の三名連記法等々関連する技法を挙げれば際限がないほどであり、もつて西鶴の思考法や彼の創作法の重要部分の追求の手掛りとすることができる。

五ノ五は挿面に元服以前の世之介の姿の見られることから、一度は本文の元服以前の章として成立してあり、挿面まで成立してあったのに、修正案によつて別稿を採択して本稿は一旦廃案になり、のち修正案で(総榊集の段階か)復活の文章中に納められたものであらうと思われる。本章を初めに廢案にした理由は、おそらく全体的構想の確立される中で、巻四末までの前編に三都遊里物を素材としないこと、三都遊里物は巻五以下の後編に素材とすること、との方針が確立したわけであらうと思われる。本章を除くと、巻四末までに三都遊里物の記事の現われるのは、三ノ五「集礼は五刃の外」の吉原高雄の件と四ノ六「目に三月」の島原の記事とだけである。四ノ六で世之介はたいてい女郎にさえ振られて遊里遊びは身銭ですべきものと認識し、その上で遺産相続で分限者になつて遊里遊びに精励することになる。そのためにはそれ以前の三都遊里物は邪魔物になる。た

だ三ノ五の記述は懐古譚に過ぎないので無視できるが、五ノ五の原形は一章全体が島原の遊里遊び物であり、しかも四ノ六の内容に不都合な豪遊型なので除去せざるをえなくなつたわけである、と思われる。

豪遊の内容は、ある人が丸居の七左衛門方でやったということとを模倣して、遊里遊びに必要な道具類を長櫃數個分作らせて行くさきさきへ持たせた、というものである。もつとも、遊里遊びは元來特定の揚屋で行なうものなので、行くさきさきとするのは不審である。おそらく世之介の上方での遊び所が島原であつたり新町であつたりするなどとするのを含みとしてそういうのであろう。趣向としてはさほど珍奇なことでもなく、そのためかえて元服以前の本文にも不似合ではないが、同時にさして興味をそそられる内容でもなくなつてしまう。魔案こそ自然であると言える。

八ノ四は三都遊里の遊女四十四人の衣裳人形を長櫃十二棹に納めて持参し、長崎中の人がながめ暮したというものである。遊女の人形のごとは五ノ六に趣向を変えて再現する。珍奇な趣向としてお気にめしたのであつたらう。

豪遊型には通例更に一条の豪遊描写が附随する。同一遊里全体の遊女を惣揚げにするといった描写である。

何其あけの日は。禿共が立酒。さいはい関送りとて。隔子の女郎ひとりも残さず一日買とふれをなし。(五ノ二)

(四)折節初紅葉の陰に。自在をおろし。金の大間輪。もろこしの酒功讃を遊すとて。遊女三十五人おもひ／＼の出立。紅あゝの。欄前だれ。

より金の玉だすき。あや相のおもひ葉をかざし。岩井の水は千代せとて。亂れ遊びの大振舞。(八ノ四)

五ノ六はその種の記述を欠くが、それは同章の主題が遊客自身の遊び道具の調達のみで、對他行動を含まぬものであるの、それとの調和のためである。

一代男の豪遊の型は贅の限りを尽くすという類である。「奢(せ)第一の世之介」(八ノ三)というクテマエからもそうなのであろうが、それを直ちに西鶴の豪華好みと言つてしまつてよいものかには疑念が持たれる。ある種の向う請けをねらう作品ではこのような方法の方が手取り早いからである。粹人風のさりげなさをよそつた豪遊さでは種明かしを必要とする。江戸中のソバを買占めた上でソバの二杯を贈つた豪遊ではその種明かしを必要とする。それは言つてみれば二段構えの方法と言える。それに対して奢り第一の豪遊は一段構えであり、華やかでもある。一代男で西鶴がその種の方法を採用した理由はよく理解できる。そのことの中に西鶴のヨミを知ることができる。